長崎ば、さるかんね

―平成 18（2006）年度「地理学特講（地理学臨地実習）」「地域環境学臨地実習」の覚え書き―

香　川　貴　志
（京都教育大学）

Let's walk around Nagasaki
－A Memorandum of Field Trip in Nagasaki City－

Takashi KAGAWA

2006 年 11 月 30 日受理

抄録：本論文は、筆者が隔年で担当している「地理学特講(平成 18 年度から地理学臨地実習より名称変更)」および「地域環境学臨地実習」の実施記録であり、同様の小稿を記し始めてから 3 回目にあたる。過去 2 回の記録を参考にしながら実施した今回の授業は、主催者側が「日本で始めてのまち歩き博覧会」と主張する「長崎さるく博」開催中の長崎市をフィールドとして、「さるく（＝長崎の方言で「歩く」の意味）」ことを通じて、アーバンツーリズムの具現化を市内各所で体験するフィールドトリップとなった。文化交流と平和学習をテーマにした修学旅行の行き先にも選ばれることが多い長崎での経験は、教員への就職希望者が多い受講生諸君に大きな刺激となったであろう。また、フィールドトリップの立案から評価までの始終を記録した本稿は、過去 2 回の記録がそうであったように、今後同様の授業を行う際に有益な情報源となろう。

キーワード：フィールドトリップ、アーバンツーリズム、地域振興、観光開発、長崎

Ⅰ．はじめに―対象地域の確定とシラバス作成―

本稿が対象とする授業科目の位置付けは、既に述べた（香川 2003, 2005）ので省くが、本年度は 2 年前に実施した道央地域の場合と同様に、大学院開設科目「人文地理学特論」の授業の一部をリンクさせ、大学院の受講生にフィールドトリップの立案から実施までの多くの部分に参画させた。ただ、行き先が確定していないと受講登録がし難いことを危惧して、対象とする地域は事前に担当者が選定し、それをシラバスで公示のうえ受講希望者を募る方策を採った。

対象地域は、原則として担当者自身が訪問した経験のある地域を選定することにしているが、授業時間の内外で学生たちから比較的多くの希望が出されていた長崎を選定した。おりしも長崎では 2006 年夏に「長崎さるく博」が開催予定であることが判明しており、アーバンツーリズムに活路を探る都市の姿を学ぶには最適といっても過言ではない条件が整っていた。「さるく」とは長崎の方言で「歩く」という意味であり、本稿のタイトルを標準語にすれば「長崎をそぞろ歩きしてみませんか？」という表現になる。各種の見どころがコンパクトな市街地に点在する長崎にとっては、ウォーキングブームの風を受けて都市の個性をアピールする絶好のチャンスでもあった。また、事前学習で文献研究をした後に既習内容を現地で確認し、疑問があれば現地での質問や討論で解決を図る「地理学特講」と「地域環境学臨地実習」では、「長崎さるく博」開催中の対象地域を歩くことで主体と客体の双方が経験できるのも魅力であった。

両授業科目のシラバスは、ごく一部を除いて内容を共通させて作成している。これは既述（香川 2003）のとおり、地理学の担当教員が総合科学課程の地域環境学コースを兼任しているために工夫された措置である。ただ「地域環境学臨地実習」については、平成 18（2006）年度の新入生から総合科学課程が廃止されたため、今回を含めて残り 2 回で廃止予定である。

近年の両授業科目は、体験型学習が脚光を浴びる中で結構な人気科目になっていて、交通費を含めると相応

の費用を要するにも関わらず、筆者が担当した直近２回（平成 14(2002)年および平成 16(2004)）の実績では、ともに 20 名前後の受講生を集めている。受講生数が過度に多くなると現地での行動が効果的に進められないため、シラバスには受講人数の制限をすることがあるとの記述を添え、予備登録をしても受講が認められないケースが生じ得ることを滲ませておいた。このように受講生にとっては必ずしも有難くないシラバスが公表された一方、年度始めに予備登録をしてみると想像以上の受講希望者がおり、受講者の選定に難渋することとなった。その顛末については次章で述べることにする。

Ⅱ．やむなき決断―初めての２班編成による変則実施へ―

新年度を前にした 2006 年３月 23 日、数日後に公表されるシラバスの内容を反映させた案内である「平成 18 年度『地理学臨地実習』および『地域環境学臨地実習』の実施について」を担当者（香川）の研究室ドアと数箇所の掲示板に掲出した。「地理学臨地実習」は平成 18 年度から「地理学特講」に変更されたが、名称変更の影響を受けない２回生以上を対象とした科目であるため、掲示板には旧来の科目名称を記しておいた。以下の本稿でも旧名称である「地理学臨地実習」を用いる。掲出された案内のうち香川研究室ドアのものには、受講希望者が氏名と受講希望科目（「地理学臨地実習」と「地域環境学臨地実習」の別）を記入できる予備登録用紙を並べた。この案内には、現地実習の日程に加えて、第１回事前学習会の開催日時と場所（4 月 26 日(水)午後、地理学実習室）も盛り込んでおいた。予備登録用紙への氏名の記入は、その後の効率的な事前学習のために 4 月 18 日(火)までに済ませるよう指示した。

案内掲出の直後から早い出足で受講希望者が氏名を書き始め、締切日までに中途で予備登録用紙を追加する事態となった。結局、締切日には 37 名（うち１名は大学院開設科目の一部で参加する大学院生、4 名はオブザーバー参加する大学院生）が記名し、当初の予定通りに進めれば約半数の受講希望者を門前払いする必要が生じた。フィールドトリップの楽しさを多くの学生たちが享受したいと考えてくれていることは、地理学を生業とする筆者にとって相当に嬉しい反面、受講許可を与える学生を選別しなければならないことは苦痛でもあった。

教務課への相談や思案を経て、従来の「地理学臨地実習」と「地域環境学臨地実習」では前例の無い２班編成を決断した。ただ、2 つの班を別個に離れた日程で組んだ場合、担当者の出張日程がトータルで長くなってしまい通常業務に支障をきたすデメリットが危惧される。また、今回の現地実習で是非とも実施したいと企画していた軍艦島周辺クルーズは、相応の人数が集まらなければ団体割引を活用しにくいことも分かった。そこで、当初の現地実習の日程が８月４日～8 月６日であったことは一切の変更をせず第１班とし、8 月６日～8 月 8 日に第２班を設定して､8 月６日の午前中を２つの班の共同実施にして軍艦島周辺クルーズに充てることにした。結果、第１班の集合は８月４日の午前９時で解散が８月６日の正午過ぎ、第２班の集合は８月６日の午前 9 時で解散が８月８日の正午過ぎとなった。両班が共同行動をとる８月６日は日曜日であり、観光で地域振興を図る都市を夏休み期間中の休日に観察するには、8 月６日を外すことはできなかった。

かくして、4 月 19 日（予備登録締切日の翌日）に受講希望者を全員受理した旨の案内、および参加希望班（第１班と第２班の別）を問う名列表を筆者の研究室ドアに掲示した。各班への振り分けは 4 月 26 日午後の第１回事前学習会までに概ね確定する必要があったが､筆者の学内業務のため 4 月 26 日午後の事前学習会が開催できない運びとなり、その日程を５月 10 日午後に振り替えた。これを受けて、5 月１日までに参加希望班を名列表に記入しておくよう指示した。記入締切日までに全ての受講希望者が意思表示はしなかったが、意思表示なき者については参加希望者が相対的に少なかった第２班に可能な限り振り分けて両班を編成した。

現地での行動を２班編成にしたため若干の余裕が生じ、追加登録希望者を第１回事前学習会までに募った。この前後に数名の辞退者と追加登録希望者があり、最終的に現地での実習に参加したのは、第１班が 27 名（うち、単位取得済みでオブザーバー参加の大学院生が男子４名、4 回生が女子１名、3 回生が男子４名・女子８名、2 回生が男子７名・女子３名)、第２班が 11 名（うち大学院生が男子１名、5 回生が男子１名、4 回生が女子２名、3 回生が男子７名）となった。学部開設の２科目について登録科目の別をみると、「地理学臨地実習」は 20 名、「地域環境学臨地実習」が 16 名であった。

上の数値を概観すれば、第１班の人数が少し多過ぎるきらいはあるが、他の集中講義(社会調査実習)の受講

を希望する者が第２班の日程に参加できないこと、当初に公表した日程が第１班のものであったことなどを考えれば、仕方がないことであろうと思う。幸いにも多人数の第１班には、京都教育大学の学部から鹿児島大学大学院(農学研究科)に進学し修了後、現在は長崎県立清峰高等学校で常勤講師を務める永矢麻希子さん、京都教育大学の学部卒業と大学院修了を経て聖母学院小学校で常勤講師を務める山﨑貴子さんが指導補助を申し出てくれたため、その言葉に甘えることにした。現職教員のサポートが得られたことは、多人数ゆえに現地実習の際に列が縦長になりがちな中で、効率的な行動が期待できる点で有難かった。彼女らは学部時代に複数回の臨地実習に参加しており、その運営についての理解がある。現地での夕食時にも参加学生と様々な会話をしてくれたようだ。

Ⅲ．事前学習会

「地理学臨地実習」と「地域環境学臨地実習」の両科目は、現地見学とそれを反映したレポートだけでは実施効果が見込めない。そこで、筆者は参加学生に対象地域の文献を読ませ、そのエッセンスをＡ４用紙１枚にまとめたものを参加学生と筆者に配布させ、その紹介内容についての質疑や補足説明を経て、対象地域への知識と愛着を高める工夫をしてきた。今年度の両科目ともこの方法を踏襲している。ただし、現地実習の対象地域である長崎市を扱った文献に限定すると、その渉猟に苦労することが必至であったため、文献が取り扱う地域の範囲は長崎県下であれば認めることにした。

このような文献紹介は、担当者間で論文が重複しないよう配慮が必要であり、また各担当者が発表する日時も調整しなければならない。そこで、第１回事前学集会（5 月 10 日実施）では、「人文地理学特論」を受講する大学院生、オブザーバー参加する大学院生にも出席を要請し、学部開設の両科目についての趣旨説明ののち、まず参加学生各自の発表日を決定した。そのうえで、紹介論文が決まれば早急に筆者の研究室ドアに貼付した所定用紙に題目を記し、重複が生じないように配慮することを徹底しておいた。幸いにもオブザーバー参加する大学院生のうち２名からも論文紹介をしてもらえる運びとなった。

そこで、第２回事前学習会（5 月 31 日実施）では、まず長崎への交通手段のガイダンスをした後に、大学院生および 3･4 回生の一部から論文紹介をしてもらった。これらの論文を第２回事前学習会で紹介された順に列挙すると、長崎市と佐世保市の斜面市街地をテーマとした杉山・全（2001)、長崎港の沖合の島である高島の文化景観に関する香川（1993ａ)、近現代における長崎の景観と文化に焦点を当てた兼重（1992)、単一企業地域の崩壊について高島を事例に論じた西原（1998)、長崎市の伝統的建造物群の活用を論じた菊池（2004)、農地転用から長崎市の都市化へアプローチした竹内（1969)、1957 年の諫早水害による洪水と橋の強度との関係を考察した山口・木下（2001)、長崎県全域を対象として郵便局の立地展開と郵便輸送網を解明した神原（1995)、諫早湾干拓による漁業変化を掘り下げた磯部（2001）である。事前学習会における論文紹介が初めてであったためか質疑応答は低調であったが、配布されたレジュメに記載しきれていない点を筆者(香川)が補足したため、相応の理解は得られたのではないかと考える。第２回事前学習会を閉じるに際しては、次回の第３回事前学習会を 6 月 28 日に開催することに加え、そこで論文紹介をする学生を告知しておいた。

ほぼ１ヶ月のインターバルを経て、6 月 23 日に第３回事前学習会を開催した。ここでは、まず現地での行動予定を記したプリントも配布し、8 月 6 日の午前中が１・２斑の合同実施であるため、両斑間の行動計画が内容的には同一であることを理解してもらった。ここで参加学生に示した行動計画は、第２斑の最終日に台風接近が伝えられたため現地で臨機応変した。詳しくはⅤ章で述べる。第３回事前学習会における論文紹介では、以下に列挙する論文が取り上げられた。

すなわち、長崎の主要産業である造船業をめぐる技術者集団を取り上げた村上（1994)、五島列島を対象地域に消費者購買行動を考究した宮澤（1996)、佐世保市のハウステンボス開業直前の姿を描いた香川（1993ｂ)、長崎の在日中国人の社会経済的地位の変化と居住地拡散を研究した阿部（1997)、佐世保市とハウスボスのエクスカーションガイドである岩見（1999)、戦前～戦後における五島列島の小集落の変化を論じた隈部（1960)、長崎市域における太陽光発電の利用実態をエネルギー環境教育の視点から論じた富山・矢ヶ部（2005)、長崎市の大気環境を北九州市と福岡市との比較から論じた水野・小林（2001)、長崎市深堀地区の武家屋敷跡と石塀の保存と活用を考察した岡林・北村・串山・村山（2003)、長崎空港周辺の航空機騒音を生活環境との関連から追

究した宮原（1982)、長崎地方の黄砂来襲の出現頻度を論じた荒生・伊東・古謝（2003)、言語としての長崎弁の助動詞を研究した渡辺（1999)、長崎を中心とした自治会の環境政策を論じた中村（2000)、以上の 13 編である。「地域環境学臨地実習」の受講生には、科目の性格上、必ずしも地理学分野での論文紹介を強要しなかったため、多岐にわたる分野の論文が紹介された。ただ、13 編の論文紹介と質疑応答はさすがに長丁場となり、終盤には担当者(筆者)を含め、全員が疲労を隠せない状況となった。論文紹介は出席者の積極的な関与を期待するならば、1 回あたり 10 編がほぼ限界であろう。次回以降の教訓としたい。

第４回事前学習会は、前期試験の日程との関係もあり 7 月 12 日に実施した。これが現地での集合を前にした最終の事前学習会である。したがって、ここでは、まず現地での行動予定を配布レジュメにしたがって説明し、特に集合場所と時間を徹底のうえ、集合時には宿舎の送迎バスに不要な荷物を預けられることを告知した。論文紹介については、不慣れな２回生が中心となるため、彼ら彼女らについては九州大学地理学研究室（2003）による『地域調査報告６ 長崎市とその周辺』の個別の章をグループで紹介することを認めた。この文献については、以下の本文で「九大（2003)」と略記する。個人で個別の論文を紹介することも当然ながら出来ることとした。第４回事前学習会で紹介された論文は以下に列挙するとおりである。

すなわち、都市工学の立場から長崎市内のサウンドスケープにアプローチした井上・柳井・後藤（2005)、街路樹と生垣の分布実態を長崎市とその周辺地域で解明した中西・南・福田・中西（2003)、長崎ランタンフェスティバルを事例として長崎華僑の祭祀と芸能を考察した王（1998)、肥前半島に分布する石造りアーチ橋を山村研究の視点から取り上げた隈部（1991）が個別論文として紹介され、九大（2003）からは、第Ⅳ章と第Ⅶを除く内容が取り上げられた。同書における個別の章タイトルを順に列記すると「Ⅰ 長崎市とその周辺」「Ⅱ 斜面都市としての特質」「Ⅲ 交通体系の特徴」「Ⅴ 町並み保存事業」「Ⅵ 長崎ランタンフェスティバルと中国人コミュニティー」「Ⅷ 池島炭鉱」である。

以上のように、４回にわたった事前学習会からは多彩な知識を得ることができたが、質問者が一部の参加学生に限定されるなど、質疑が全般的に低調であったことは否めない。参加学生の人数が通常の演習（ゼミ）よりもはるかに多く、彼らにとって質問し難い環境であったのかもしれないが、そうした環境を限られた時間の中で創出できなかったことは担当者として恥ずべき反省点の一つとして記しておきたい。

Ⅳ．大学院「人文地理学特論」におけるフィールドトリップ企画

平成 16（2004）年度に道央地区で実施した「地理学臨地実習」および「地域環境学臨地実習」では、今年度と同様に大学院「人文地理学特論」の一部を共通実施する方法を試行した。しかしながら、大学院の授業としての独自性を充分に得るには至らず、その二の轍を踏まないように留意する必要があった。そこで今年度は、現職教員で事前学習へ参加が極めて困難な大学院生を除き、オブザーバー参加の大学院生にも積極的に授業へ参加してもらうために一人当たり１題の課題を与えた。それはフィールドトリップの企画力育成を目的としたもので、5 月 10 日の第 1 回事前学習会の翌日に大学院生との相談を経て決定した。課題は次のようなものである。

（課題１）京都から長崎への利用交通手段の種類、各々の所要時間や費用を比較。
（課題２）軍艦島(端島)周遊船の詳細情報の収集と仮予約。
（課題３）長崎で滞在する宿舎の情報収集と仮予約。
（課題４）現地実習での行動スケジュールのプランニング。

大学院生は日中に常勤講師を務めている者もおり、他の受講科目との関係で全員が集まっての討論は困難であることも判明したので､それぞれの課題に対する取り組み結果を 5 月 25 日までに筆者へｅメール添付で送信させ、それを修正しながら第 2 回事前学習会の資料を作成する傍らで個別指導することにした。大学院生が各自で行う資料収集活動はフィールドトリップの企画では避けて通れない重要な要素であり、集めた資料をまとめる作業は企画書作成力の向上に寄与できたと考えられる。また、提出資料の修正過程では、企画の困難さと面白みを実感できたに違いない。

上記４つの課題のうち、課題１～３については、第２回事前学習会までにまとめておく必要があった。このうち課題２は、インターネットを活用した調査結果とリーフレットの取り寄せが報告されたが、課題１は筆者

(香川)が大幅な加筆修正を行った資料を第２回事前学習会で配布し、課題３は担当した大学院生・宿舎・旅行代理店と綿密な調整を図りながら正式予約まで至ることができた。長崎の景観を象徴する夜景自慢の宿舎「矢太樓」を学生にとっての適正価格で、しかも第１班・第２班を通じて一括予約できたのは、「長崎さるく博」開催中かつ８月９日の長崎原爆忌を前にした日程でありながら幸いであった。また、課題４については、８月６日を共同実施とした２班構成の実習であるため、両班の現地行動計画を工夫する必要があり、現地実習の直前まで継続的にブラッシュアップを図っていくことにした。詳細については次章で述べる。

Ⅴ．現地実習

1．第１班の第１日（８月４日、晴れ）

第１班は８月４日の午前９時、ＪＲ長崎駅改札前に集合した。若干の遅刻者が出たが９時 15 分頃には全員が揃って点呼を取り、自動車で長崎入りした大学院生のグループに運んでもらった長崎さるく博’06 推進委員会編（2006)『長崎さるくマップブック』と１万分の１地形図「長崎」の２点を配布した。不要な荷物は宿舎「矢太樓」のマイクロバスで運んでもらうことができた。点呼と資料配布を終え、駅前で当日の行程と長崎駅周辺の地理的特徴について説明したのち、コース番号 14「長崎はローマだった」を歩き始めた(**図１**)。このコースは、駅前からスタートして早速に長崎の坂道が体験でき、長崎の地形的な特色が歩きながらに味わえるよう設計されている。ただ時間の関係から、このコースの見所の一つである日本二十六聖人殉教地は割愛し先を急いだ。コース後半も一部を省略し、次のポイントである長崎歴史文化博物館に至った。

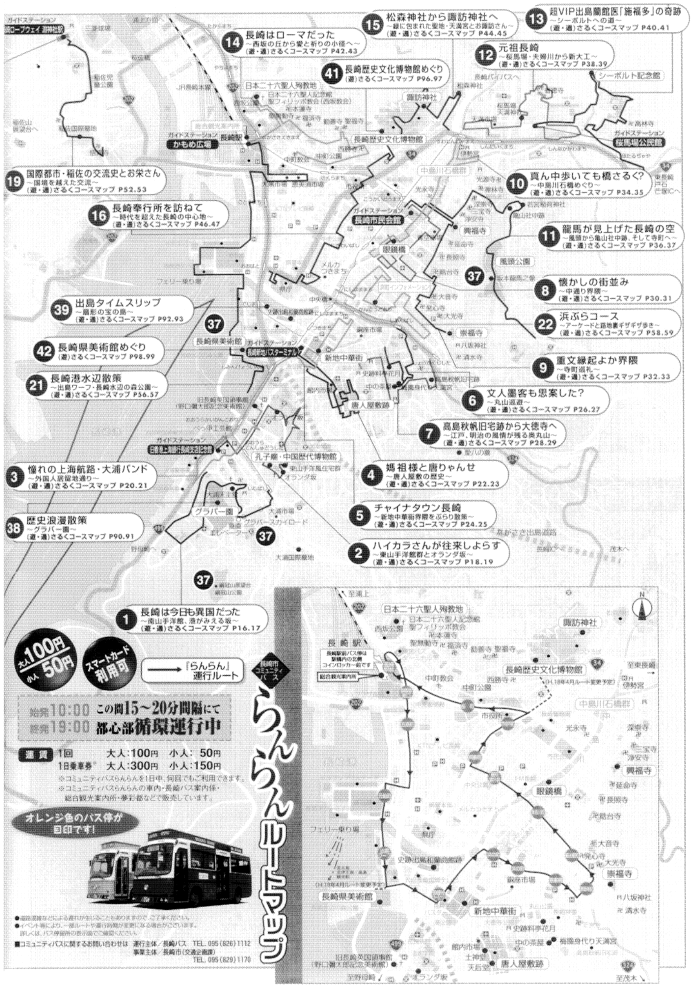

図１　長崎市主要部における「さるくコース」

（長崎さるく博’06 推進委員会編（2006)『長崎さるくマップブック』p. 3 より転載）

長崎歴史文化博物館は、コース番号 41 に指定されており、ここで館内の自由見学時間を 1 時間少し確保した(図 1)。ここまでの道のりで暑さに参っていた学生たちも、空調が効いた空間で一息つけたようだ。夏場の野外行動では、こうした体力回復を図れる施設を随所に盛り込んでおく必要がある。館内では、他の来館者に配慮して団体行動は慎み、個人のペースで回遊してもらうことにした。

博物館で精気を取り戻した一行は、再び猛暑の市街地を歩き始めた。それは、コース番号 15「松森神社から諏訪神社へ」の逆コースで、博物館から諏訪神社前電停に至るものである(図 1)。アップダウンの激しいコースながら、諏訪神社の神域を主としたものであるため、夏の強い日差しを避けることができた。諏訪神社拝殿前の階段(長坂)の上からは、目の前に展開する長崎市街地が参加学生の感動を誘ったようだ。その場を利用して、傾斜地に展開する市街地の特色を解説した。一行が諏訪神社前電停に至ったのは午後 1 時過ぎであったため、ここから路面電車で西浜町電停まで移動した。電停近くのアーケード入り口付近で日差しを避け、その場で長崎は地形的な制約から中心商業地がコンパクトにまとまっていること、商業地の地価が全国的にみても割高であることなどを説明した。これらの解説の後、昼食のために一時解散することにした。若干の時間的な遅れはあったが、ここまでのルートは当初の計画通りに進めることができた。

昼食時間は 1 時間少々を確保した。再集合の後、我われは西浜町電停から、コース番号 39「出島タイムスリップ」に指定された出島ワールドに向かった(図 1)。午後の日差しは全身を焦がすように強かったが、中島川の左岸に展開する出島の外郭(扇の内側部分)がくっきりと判別できる景観は、学生たちの疲労を和らげたようだ。「歴史の教科書で見たとおり！」との声も多く聞かれた。出島ワールドは整備されて以降、一帯が有料施設となっているが、上述の長崎歴史文化博物館と同様に団体割引を適用することができた。施設内では他の来場者を配慮して自由観覧とした。

出島ワールドを後にして、我われは部分的にコース番号３「憧れの上海航路・大浦バンド」を辿ったのち、コース番号２「ハイカラさんが往来しよらす」に入り、長崎観光の主要ポイントが点在する東山手地区を歩いた(図１)。活水女子大学の近くのオランダ坂を上がったあたりで疲労している学生も見受けられたので、東山手十二番館で小休止した。ここでは冷水の無料サービスもあり、暑い季節のまち歩きに細かな配慮がなされていることを実感できた。その後は、ほぼコースどおりに歩いたが、暑さゆえに大半の学生に疲労が蓄積している様子が明らかであったため、ゴール地点の孔子廟は割愛して石橋電停に向かった。ここからは西浜町電停まで路面電車で移動し、浜の町バス停から路線バスで宿舎のある風頭山へと至った。ただ、参加者の数が多かったため、路線バスでは積み残しが生じ、2 斑に分けての移動となった。

宿舎「矢太樓」は風頭山の山頂付近にあるため、大半の学生がその雄大な景観に魅了されたようだ。特に各部屋からの夜景は素晴らしく、長崎の地形的特色を寛ぎながら実感することができた。夕食時には当日の簡単なまとめ、市街地から風頭山へのバス時刻表の配布、翌日の行動予定などの諸連絡を行い、疲れを残さないように早めに就寝するよう指示した。

2. 第１班の第２日（８月５日、晴れ）

第１日目が集団行動であったことと、「さるく博」を実感するには少人数での行動が適切であると考え、第２日は小グループまたは個人での行動を指示した。まず午前中は、第１日目に歩いていない「さるくコース」（「まち歩きルート」または「さるくコース拠点施設」）を最低限２つ巡り、各々について評価できる点と改善を要する点とを観察させ、地域振興や観光開発について実体験を通じた考察が出来るように誘導した。これらは帰洛後のレポート課題となるもので、前日の夕食時の諸連絡で予め伝達しておいた。参加学生がどのコースで何を観察したのかについては次章で述べる。また午後については、事前学習会で相当な時間を費やしてきたので、折角の観光地ということもあり、完全な自由行動とした。とはいえ、市街地周辺の観光ポイントはほぼ完全に「さるくコース」に内包されているので、多くの学生諸君は午前中の経験をベースにして行動したようである。この日の夕食は、最終日の予定、レポート課題の内容伝達をした後、現地実習の打ち上げコンパを兼ねたものとなった。

3. 第１班の第３日および第２班の第１日午前（８月６日、晴れ）

第１班にとっては、この日の午前で現地実習が終了するため、各自が荷物を持って宿舎のバスに乗り、第２

班との合流地点である大波止桟橋に向かった。ここで 9 時 10 分に第１班と第２班が合流し、全員で軍艦島周辺クルーズ船に乗り込んだ。軍艦島とは長崎港から南西およそ 17.5km の地点にある端島(はしま)が正式名称で、2006 年 4 月に長崎市に編入されるまでは長崎県西彼杵郡高島町に属する無人島であった。無人島とはいえ 1974（昭和 49) 年の炭鉱閉山までは、日本初の鉄筋コンクリート構造の高層住宅をはじめとする集合住宅が林立し、人口密度が極めて高い海底炭田の基地として機能した「産業の島」である。多くの学生たちが事前に何らかの方法でこの島のことを自主的に調べ、今回のクルーズを楽しみにしていたようだ。著者は、軍艦島に関する参考図書の一例として雑賀（2003）や後藤・坂本（2006）の著書を所蔵していたが、かつての島の生活が赤裸々に描かれる部分がこれらの図書に含まれているため、学生たちが感傷的に現地観察しないように配慮し、敢えて事前にこれらの図書を紹介しなかった。軍艦島周辺を至近距離から回遊する時間は、廃墟となった島の異様な景観が乗船客の心を打ったのか、我われを含めた客の大半が無口となり船上での解説に耳を傾けた。

このクルーズ参加の企画は、日本のエネルギー革命や産業史を凝縮したような歴史が目の当たりにできる点で、特に教職を志す学生諸君には大きなインパクトを与えたようだ。サポート参加してくれた女性教員２名にとっても、教育現場で活用できる良好な教材が得られたに違いない。目的地である軍艦島周辺海域に至るまでも、長崎湾の湾口に架けられた女神大橋、長崎を代表する産業である造船業の巨大ドック、リゾート・アイランドとして再生を図る伊王島や高島を解説付きで学ぶことができ、有意義なクルーズであった。

大波止桟橋へ無事に帰着した後、第１班の解散式を行い炎天下での行動をねぎらい合った。第２班の参加学生に対しては、各自で昼食を摂った後、午後１時 30 分に長崎駅改札前に再集合するよう指示した。

4. 第２班の第１日午後（８月６日、晴れ）

再集合の後、第２班の参加者を引率して、第１班の第１日午前と全く同じルートを辿った。今回の現地行動を２斑構成にしたのは著者の都合(＝多人数を引率するのが困難)によるため、両班の行動内容には可能な限り不公平が生じないように配慮する必要があった。いきなり午後の強い日差しの中での行動となったため、参加者の体力消耗も著しく、ひとまず諏訪神社電停から路面電車で長崎駅に移動し、一部の学生がコインロッカーに預けていた荷物をピックアップした後、路線バスで宿舎のある風頭山に向かった。奇しくも我われが乗車したバスは、第１班が初日に浜の町停留所から乗車したものと同じ時間帯のものであった。夕食時には、翌日の予定を伝え、体力回復のため早く就寝するよう指示した。

5. 第２班の第２日（８月７日、晴れ）

上述した第２班の第１日は、第１班最終日と第１班初日の内容とで午前・午後を構成している。したがって、第２班の第２日午前を、第１班の第１日午後と同じものにした。浜の町～出島～オランダ坂～東山手～孔子廟という道順である。詳細は本章２節に譲るが、第２班は孔子廟の前で午前の行動を解散し、午後は第１班の第２日目午前と同様の小グループまたは個人での選択的自由行動とした。ここでの観察事項がレポート課題になることは、第１日の夕食時に伝えておいたので、各自が積極的に地域観察をしたようである。参加学生たちが多く選んだコースについては次章で詳述する。この日の夕食は反省会を兼ねた打ち上げコンパとなったが、担当者(香川)にとっては２日前にも同様の行事があったため、さすがに疲れは隠せなかった。

6. 第２班の第３日（８月８日、晴れ）

前日の夜の気象情報でも伝えられた台風が、この日の夕方にも近畿地方に接近することが報じられ、朝から航空機や新幹線などの運航(運行)予定を確認する作業に忙殺された。長崎は相変わらずの晴天だったため、フィールドに出るには好都合であった。第１班では第２日の午後に設けた自由行動は、第２班では最終日の午前に配置せざるを得なかった。当初は長崎駅前で一時解散の後、正午頃に同じ場所で再集合して正式解散という計画であったが、航空機の運航に支障が出始めているとの情報を朝のミーティング後にキャッチしたため、長崎駅前で再び簡単なミーティングを開き、帰路の交通機関が乱れる恐れがある旨を伝え、自由行動は各自の責任で行うように指示して午前 10 時過ぎに図らずも緊急解散となった。担当者にとっては８月３日に京都を発って以来、1 週間近くに及ぶ現地実習の指導を何とか無事に終えたが、解散した途端、安堵と虚脱感が入り混じった妙な気持ちになった。２班構成の現地指導は同じ内容のリピートを余儀なくされるため、盛夏に実施する

には少し無理のあることが今回の行動で分かった。次回からは定員を厳密に決めておいて、２班構成は改める必要があろう。

Ⅵ　学生のレポートからみた長崎―むすびに代えて―

現地実習を主とするスタイルの授業科目では、事前学習と現地行動だけから成績評価を行うことが難しい。そこで本授業科目では、現地実習終了後から約２週間以内にレポート提出を義務付けている。提出方法は紙媒体によるものの他、電子メールによる提出も認めているが、携帯電話からの分割レポートは許可していない。

今回のレポートでは次の３課題についてまとめさせた。すなわち①軍艦島周遊クルーズで考えたこと、②全体で行動した「さるくコース」（第１班は１日目午前および午後、第２班は１日目午後および２日目午前）で最も感心した点とその理由、③個人または小グループによる課題行動で体験した「さるくコース」（第 1 班は 2 日目午前、第２班は２日目午後）から２つを選び、それぞれで評価できる点と改善を要する点を整理して述べる、以上の３課題である。

まず上記①に関してまとめてみる。ほぼ全員に共通して、廃墟と化した産業の島が持つ独特の荒廃感への感動が述べられていたが、船内での解説の丁寧さと内容の良さ（例えば島の東西の護岸高の違いが波浪の高さと深く関連していること、職階によって住居の場所が違ったことなど）に感心したとの報告も多く認められた。端島（軍艦島）が世界遺産登録を目指している事に関しては、賛成意見が優勢であったが「世界遺産登録よりも重要文化財登録の方が適切」「世界遺産登録には立ち入って見学できるコース設定が必要」など辛口の考えも散見された。また「エネルギー転換の語り部としての教材に最適」との指摘も複数みられたが、こうした見方は教育学部に所属する学生ゆえの視点であろうと思われる。一方「自身の事前調査不足を恥じ入った」との反省点の表明が得られたことからすると、事前学習の際に多少の誘導が必要であったかもしれない。

次に上記②に関して整理する。レポート提出義務のある院生・学部生 34 名がまとめたレポートで関心点として挙げられた事象を整理すると、長崎歴史文化博物館、東山手地区、路面電車が各７件、風景・観光・博覧会と出島が各５件、地形が３点となった。長崎歴史文化博物館については、来館者を飽きさせない展示の工夫に感心したとの記載が大半で、東山手地区では、和洋折衷の景観と周辺地形の織り成す長崎情緒が学生たちの心を惹いたようだ。また路面電車については、全区間をワンコイン（100 円）で乗れる運賃の安さに加え、利便性に富んだ運行間隔の短さが高い評価につながっている。風景・観光・博覧会に関しては、「さるく博」をめぐる都市観光を客観視した感想が得られた。「多額の金銭をかけないような工夫」や「成熟した接客態度・食文化」などのプラス評価が得られた一方で、「道端に案内地図が不足している」というマイナス評価も見出せる。さらに、出島については、復原への意欲、展示方法が高い評価を得ることに成功した。「小中学校の歴史学習に最適」という校外学習をイメージした評価も見られる。地形に関しては、これを記した学生の全てが「歩くことで起伏の多さを実感した」旨のレポートを寄せており、当授業科目の目的の一つがうまく達成できたようだ。

続いて上記③について述べる。ここでは２点の「さるくコース」を挙げさせたが、個人ではなく 2～4 人のグループで行動した者が多かったため、同じグループのメンバーの選択コースが多重票になっているケースが多い。しかし、それもグループでの協議の結果であると判断した。５票以上を集めたコースを順に列挙すると、コース番号 17「アンゼラスの鐘の丘を訪ねて」（11 票、図１郭外の北にある浦上地区）、コース番号 25「日本一！長崎ペンギン水族館ツアー」（9 票、図１郭外の東北東にある東長崎地区）、コース番号 38「長崎浪漫散歩」（9 票）、コース番号 5「チャイナタウン長崎」（8 票）、コース番号 11「龍馬が見上げた長崎の空」（7 票）、コース番号 40「長崎原爆資料館めぐり」（6 票、図１郭外の北にある浦上地区）、これらの 6 点である。

まず最多票のコース番号 17「アンゼラスの鐘の丘を訪ねて」は、コース番号 40 と同じく原爆投下爆心地の浦上地区に設定されたコースである。ただ、11 票を数えるコース番号 17 の選択者のうち、コース番号 40 も選択した者は僅かに 3 名であり、他の 8 名は図 1 内のコースを別途選択していた。コース選択は学生に任せたが、自主的に行動範囲を広げて多角的に都市を観察できていたといえる。他方、コース番号 40 を選択した 6 名のうち 5 名は、コース番号 17 を含む浦上地区の外から別途コースを選択（5 名のうち 2 名は 3 コース選択で、そのうちの 1 つがコース番号 17）しており、自主性に任せても行動範囲が広いことに変わりはない。レポートの内容についてみると、コース番号 17 の「評価できる点」は、全員が一致して「平和を考えられる一貫したテーマによるコース設定」という趣旨の記述をしていた。「『怒りの広島、祈りの長崎』を実感」という記述も複数みら

れ、被爆地長崎の心が確実に伝わるコース設定が高く評価できる。逆にコース番号 17 の「改善を要する点」では、「このコースについては地図が分かり難い」という記載が過半数でなされ、「坂道が多いので休憩できる場所がもう少し必要」という記載が散見された。「コースを逆にして 17→40→18 だと歩き易い」との感想も得られたが、主催者側では 40→17 と 40→18 を別個に設定し「少なくともコース番号 40 を最初に体験してから、長崎を実感して欲しい」とのメッセージを込めて考えたのではないかと推察する。

浦上地区の拠点的施設であるコース番号 40「長崎原爆資料館めぐり」の「評価できる点」は、ほぼコース番号 17 のものと同様で、「改善を要する点」では「バリアフリーが不十分な箇所がある」「再入場可能とはいえ館内にトイレが無いのは不便」「車椅子からは見難い展示」などが散見された。これらは施設改築が必要なほどの注文ではないうえ、平和をアピールする施設でもあるので、改修の機会に恵まれれば検討の余地があろう。

今回 2 番目に多い 9 票を集めたコース番号 25「日本一！長崎ペンギン水族館ツアー」は、レンタカーを借りて訪問した男子学生のグループ、公共交通機関を乗り継いで到達した女子学生のグループからの集団票である。「評価できる点」については、ほぼ全員が「ビオトープや公園も併設された家族向けのトータルな空間構成」を指摘し、ここが外来の客だけでなく長崎市民にとっても憩いの場になっていることを読み取れる。他方「改善を要する点」は、「公共交通の便が悪い」「屋外に日陰が少なく夏場は辛い」「魚類の展示に一貫性が乏しい」などが得られた。公共交通の便に関しては、自動車利用を前提とした施設が多い地方都市の宿命的なものであろうが、今後の高齢社会を考えれば、長崎に限らず多くの地方都市において改善対策が図られるべきである。

同じく 9 票を得たコース番号 38「長崎浪漫散歩」は、有料施設（長崎市民は無料）のグラバー園の園内を巡るコースである。長崎を代表する観光地として長らく親しまれているが、車椅子対応のトイレ整備、南山手地区の公共通路としてのグラバースカイロード（斜行エレベーター）の開設などのバリアフリー対策が積極的に進められてきた。「評価できる点」では、「歩くことを前提としたバリアフリー設計の園内レイアウト」との趣旨が全員から得られ「長崎らしさが凝縮されている」や「夜間のライトアップは圧巻」が数点みられた。徐々にバリアフリー化を図りつつ成熟した観光施設の強みが評価されたといえよう。その反面「改善を要する点」については、「休憩所に冷房がない」「出口のグラバーショップは商業主義的でしらける」「各洋館の説明がもう少し欲しい」などが散見されたことに加え、「『さるく博』コースにしては既製品に過ぎる」という辛口意見もあった。ただ、グラバー園が従来の長崎観光に果たしてきた役割を考えると「さるく博」コースから外す方が不適切であっただろう。

次いで 8 票を集めたコース番号 5「チャイナタウン長崎」は、「評価できる点」として、「歩いていて楽しいコンパクトなコース」という指摘がほぼ全員から、「コースアウト抑制のキャラクターが適切に配置されている」が数名から得られた。街路が錯綜する市街地ゆえ、コースアウト抑制のための配慮は高く評価できよう。一方「改善を要する点」では、約半数から「北門をスタートにした方が適切」、一部から「説明不足の施設が散見される」との評価が下された。コースのスタート地点が長崎バス新地ターミナルであるのは、ガイドステーションを他のコース（ｺｰｽ番号 3 及び 4）と効果的に共有する必要性からであろうが、一部のコースを逆にすることで複数のコースを連続的に見学できるようにする配慮があっても良かったのではなかろうか。

コース番号 7「龍馬が見上げた長崎の空」は 7 票を得た。「評価できる点」では、「龍馬ファンを魅了する変化に富んだコース」がほぼ全員、一部の者から「随所にみられるコースアウトしないような配慮」「地元の人びとと触れ合える休憩所の存在で地域を挙げてのイベントを実感」が得られた。このコースは逆に歩いた方が味わい深いが、「さるく博」の開催時期からして標高が高い場所から下るという設計がなされており、体力消耗への配慮がなされている。しかし「改善を要する点」では、「階段が多く歩行に危険な箇所がある」「迷いそうになる箇所があり目印が不足」「たとえ下りでも健脚向き」という意見が数人ずつから出されており、「健脚向き」との注記がガイドブックにも添えられていても良かったのではなかろうか。

以上の学生たちのレポートには、長崎の人びとから受けた親切、会話や案内などでの心温まる交流も多く記述されていた。アーバンツーリズムの試金石ともいえる「さるく博」は、案内ボランティアに多く依存する企画であるが、学生たちの率直な感想はこうした企画が少なからず成功していることを物語っている。大学院生の頃に初めて長崎の地を踏んだ著者が長崎に魅了され、その後に学生たちや家族を伴って幾度となく訪問しているように、再訪を誓う気持ちを述べた学生も多く、仮に彼らがリピーターになれば「さるく博」は長期的にみて所期の目的を達成する可能性が高い。

参 考 文 献

阿部康久(1997)「長崎における在日中国人の就業状況の変化と居住地移動」人文地理 49-4, pp.395-411.

荒生公雄・伊東和博・古謝 愛(2003)「長崎地方における 1914 年から 2001 年までの黄砂現象の経年変化」長崎大学総合環境研究 5-1, pp.1-10.

後藤惠之輔・坂本道徳(2006)『軍艦島の遺産―風化する近代日本の象徴―』長崎新聞社, 222p.

井上雅裕・柳井人生・後藤惠之輔(2005)「長崎市におけるサウンドスケープに関する調査分析」長崎大学工学部研究報告 35-65, pp.54-59.

磯部 作(2001)「諫早湾の漁業―諫早湾干拓による衰退と実情―」 地理 46-9, pp. 40-45.

岩見信也(1999)「佐世保市とハウステンボスを歩く」地理 44-9, pp.82-87.

香川貴志(1993a)「長崎県高島における閉山後の文化景観」京都教育大学紀要 人文科学・社会科学 82A, pp.45-61.

香川貴志(1993b)「呼吸するテーマパーク『ハウステンボス』」京都地域研究 8, pp.53-57.

香川貴志(2003)「東京を歩く―地下鉄銀座線沿線のフィールドトリップ, 平成 14(2002)年度『地理学臨地実習』『地域環境学臨地実習』の覚え書き―」京都教育大学教育実践研究紀要 3, pp.27-38.

香川貴志(2005)「道央探訪―平成 16(2004)年度『地理学臨地実習』『地域環境学臨地実習』の覚え書き―」京都教育大学教育実践研究紀要 5, pp.33-43.

神原哲郎(1995)「長崎県における郵便局の立地展開と郵便輸送網の変化」人文地理 47-2, pp.189-206.

兼重賢太郎(1992)「両大戦間の長崎における都市空間の変容―景観形成と都市太守の意識―」 人文地理 44-1, pp. 68-81.

菊地達夫(2004)「長崎市における伝統的建造物群の活用実態と地域連携」観光研究論集(大阪明浄大学)3, pp.29-35.

隈部 守(1960)「長崎県の小島の集落―五島列島福江・赤島を中心に―」 人文地理 12-3, pp.58-66.

隈部 守(1991)「肥前半島の眼鏡橋―長崎県波佐見町・世知原町を中心に―」立命館地理学 3, pp.47-54.

九州大学文学部地理学研究室(2005)『長崎市とその周辺』 110p.

宮原和明(1982)「長崎空港周辺の後期騒音調査(その4)社会反応の経年変化について」日本建築学会学術講演梗概集 57, pp.213-214.

宮澤 仁(1996)「離島における消費者購買行動の一考察―長崎県五島列島岐宿町の事例―」 経済地理学年報 42-1, pp.44-57.

水野光一・小林 悟(2001)「長崎市等における大気環境と JCAP の概要」大気環境学会年会講演要旨集 42, pp.148-149.

村上雅康(1994)「近代西洋型造船所の成立と技術者集団の移動―三菱長崎造船所と播磨造船所の展開を中心に―」ジオグラフィカ・センリガオカ 2, pp.29-46.

長崎さるく博’06 推進委員会編 (2006)『長崎さるくマップブック』112p.

中村 修(2000)「自治体の環境政策の現状と課題」長崎大学公開講座叢書 12、pp.279-288.

中西こずえ・南 尚志・福田恵子・中西弘樹(2003)「長崎および周辺地域における街路樹と生垣分布の実態―都市緑化の視点から―」 長崎大学総合環境研究 6-1, pp. 73-80.

西原 純(1998)「わが国の縁辺地域における炭鉱の閉山と単一企業地域の崩壊―長崎県三菱高島炭鉱の事例―」 人文地理 50-2, pp.105-127.

岡林隆敏・北村潤一・串山智恵美・村山真一(2000)「長崎市深堀地区の歴史的環境の保存と活用―武家屋敷跡と石塀のある町並―」 長崎大学公開講座叢書 12, pp. 85-95.

雑賀雄二(2003)『軍艦島―眠りのなかの覚醒―』淡交社, 144p.

杉山和一・全炳徳(2001)「長崎県における高密度斜面市街地の抽出―長崎市および佐世保市を中心に―」 GIS-理論と応用 9-2, pp.75-82.

竹内清文(1969)「人口分布と農地転用からみた長崎市の都市化」長崎大学教育学部社会科学論叢 18, pp.31-43.

富山哲之・矢ヶ部和洋(2005)「エネルギー環境教育としての『長崎市域における太陽光発電装置の利用実態調査』」長崎大学教育学部紀要(教科教育)44, pp.57-66.

渡辺やす子(1999)「長崎弁の助動詞『ヨル』、『トル』および『テアル』に関する一考察」純心人文研究 5, pp.69-98.

王 維(1998)「長崎華僑における祭祀と芸能―その類型及びエスニシティの再編―」 民族学研究 63-2, pp. 209-231.

山口祐造・木下 良(2001)「洪水と橋の強度―1957 年諫早水害の例を主として―」 歴史地理学 43-1, pp. 34-46.